

YCU 第2クォータープログラム 派遣学生報告書

氏 名	H.M	学部・学科	国際教養学部・国際教養学科
学 年	2 年	派遣国	ニュージーランド
派遣大学	リンカーン大学		
コース名	EAP (English for Academic Purposes programme)		
期 間	2025 年 6 月 28 日 ～ 2025 年 7 月 26 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800 字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

ー授業内容についてー

授業は「EAP クラス」と「RS (Research Skills) クラス」の2種類があった。EAP クラスでは、主にライティング、リーディング、リスニング、スピーキングの4技能をアカデミックな視点から学び、最終テストやプレゼンを通じて習得状況を確認した。具体的には、ライティングではイントロダクション、本文、結論といった構成ごとに書き方を学び、リーディングではスピードリーディングなどの技法を習得した。リスニングとスピーキングでは、グループに分かれてさまざまなゲーム形式の活動を行った。毎週テーマが変わり、Week 1 は「Past Scientific Achievements」、Week 2 は「Space Exploration」、Week 3 は「Endangered Animals」、Week 4 は「Family Relationships」について学んだ。

RS クラスではレポート作成に役立つリサーチの方法や、調査結果をまとめるレポートの書き方を学んだ。

ーテスト内容についてー

EAP クラスのテストでは、リーディングは Week2 と 4 にマーク式で実施され、ライティングは Week3 と 4 にその場で与えられた課題について文章を書く形式だった。

リスニングとスピーキングでは、2-5 分間のプレゼンと質疑応答があり、Power Point を使用して自由なテーマについて発表した。いずれも、授業内で扱ったトピックに関連した内容であった。

RS クラスでは、最終課題としてレポートを提出した。内容はニュージーランド国内で行きたい場所を1つ挙げ、その観光地について地理、観光、気候などの観点から紹介するというものであった。

ー課題についてー

EAP クラスでは、毎週エッセイの提出やリスニングジャーナルのレポート作成が課されていた。RS クラスでは、Week 1 にアウトライン、Week 2 に下書き、Week 3 に下書きのリライト、Week 4 に最終レポートの提出が求められた。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

特に印象に残っているのは、Writing class と Reading Class の授業内容であり、Writing class ではアカデミックライティングの基本的な構成や文法、語彙の使い方などを詳しく学ぶことができた。毎週提出する Essay にはネイティブの先生から細かくフィードバックをいただき、英語で論理的に考えて筋道を立てて文章を書く力を着実に伸ばすことができたと感じている。Reading class では、毎日 Speed reading に取り組み徐々に長文を読むことに対する抵抗がなくなった。最終テストでは、以前よりも読むスピードと理解力の両方が向上しているのを実感した。Writing class, Reading class は毎日あったため、自然と英語に触れる時間が増え、継続した英語の学習に直接つながった。

また、Listening & Speaking class では、ゲームやディスカッションを通じて、さまざまな国の学生と英語で積極的に会話する機械が多く、自分の意見を英語で伝える力が養われた。加えて、各国の文化や価値観の違い、言語の特徴などについても話し合うことができ、異文化への理解を深めることができたと感じている。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように（気持ちなどが）変化したか。(400 字程度)

授業を受ける前は、英語で話す際に文法や言い回しを先に考えてしまい、なかなか言葉が出てこず、結局ほとんど話せないまま時間だけが過ぎてしまうということが多くあった。そのため、英語を話すということ自体に苦手意識があった。しかし、留学中の授業や現地での生活を通じて、まずは「とにかく伝えてみよう」という姿勢が身に付き、次第に英語を話すことへの抵抗はなくなっていった。実際に伝わらない場面でも、ジェスチャーや表情を使えば意外と通じることが多く、そうした経験を重ねる中で、「英語を話す自分」に対して自信を生まれた。以前のように完璧な文法にこだわりすぎることなく、自分の言葉で伝えようとする姿勢が自然と身に付いたと感じている。

(4) 今後どう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

Writing クラスで学んだアカデミックライティングは、卒論や今後のレポート作成の活用できると考えており、文法や構成を改めて見直しておきたい。また、EAP クラスを通じて英語に習慣的に触れる機会があったので、その感覚を失わないよう、継続的に英語学習を進め、TOEIC や TOEFL といった試験対策にもつなげたい。さらに、英語を話す力を維持するために、大学の留学生との交流会などにも積極的に参加し、実践的な場で学び続けていきたいと考えている。

YCU 第2クォータープログラム 派遣学生報告書

氏 名	S.M	学部・学科	国際商学部・国際商学科
学 年	2	派遣国	ニュージーランド
派遣大学	リンカーン大学		
コース名	English for Academic Purposes (EAP)		
期 間	2025 年 8 月 4 日～ 2025 年 8 月 28 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800 字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

留学中に受講した授業は、主に IELTS 試験のリスニング、スピーキング、ライティング、リーディングの四技能対策を中心に構成されていた。日本にいるときは独学で参考書を用いて学習することが多かったが、現地での授業は常に実践的で、クラスメイトと互いに意見を交わしながら力を伸ばす形式であった点が大きく異なっていた。授業は毎週一つのテーマに沿って進められ、健康、幼い子供の教育、政治、芸術といった幅広いトピックが扱われた。それぞれのテーマについて事前に資料を読み込み、授業内ではグループディスカッションや課題を通じて多角的に考察することが求められた。リスニングでは、ニュース音声や講義形式の音源を用いて要点を把握する練習を行った。聞き取るだけでなく、メモを取りながら後で要約をまとめることが課題とされ、集中力と理解力が鍛えられた。特に「健康」をテーマとした週では、医療制度や生活習慣病に関する内容が取り上げられ、専門用語を含む英語に慣れる必要があった。スピーキングでは、ペアワークやグループワークを通じて自分の意見を即座に表現することが求められた。例えば「幼い子供の教育」をテーマとした授業では、早期教育の是非や国ごと学校制度の違いについて討論を行い、自分の立場を根拠として示しながら英語で説明する練習を重ねた。日本語でも意見をまとめるのが難しいテーマであったため、英語で瞬時に答えるのは容易ではなかったが、繰り返し取り組む中で、言葉に詰まっても言い換えたり例を使って乗り切る力がついた。ライティングでは、毎回エッセイの課題が出され、与えられたテーマに基づいて序論・本論・結論を意識した構成で文章を書くことが求められた。特に「政治」を題材とした回では、選挙制度や三権分立に関するエッセイを執筆し、論理的に意見を展開する力を磨くことができた。教師からは文法や語彙の誤りだけでなく、論理の飛躍や説得力の不足についても具体的なフィードバックが与えられ、改善点が明確になった。リーディングでは、学術論文や新聞記事を教材として速読や要約練習を行った。「芸術」をテーマとする週では、音楽の役割や芸術教育の重要性を論じた文章を読み込み、設問に答えるだけでなく要点をまとめて発表する活動もあった。これにより、単なる読解力にとどまらず、読んだ内容を自分の言葉で整理するスキルが養われた。このように、授業は単なる試験対策にとどまらず、幅広いテーマに触れながら英語を使って考え、発信する力を磨く内容だった。最初は難しく感じることも多かったが、毎週異なるテーマに挑戦することで、自分の語学力だけでなく、様々な分野への関心と知識も広がった。総じて、

充実した授業内容であったといえる。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

リスニングでは、TED などを教材にして要点を素早く捉える練習を重ねたことで、以前よりも細部まで単語を理解できるようになった。スピーキングでは、限られた語彙の中でも言い換えや具体例を用いて自分の意見を展開する力を身につけ、英語で議論する際の自信が高まった。ライティングでは、論理的な文章の構成方法を学び、短時間で意見を整理して書き上げるスキルを身に着けることができた。リーディングにおいては、文章の構造を素早く把握して、重要な情報を効率的に抽出する力が向上した。また、授業で扱われたテーマを通じて、知識面でも多くの学びがあった。「健康」に関する授業では、生活習慣病や医療制度の違いを理解し、社会全体で健康を維持する仕組みについて考える機会を得た。「子供の教育」では、早期教育の是非や教育環境の格差について多様な視点を学び、他国との比較を通じて日本の課題を見直すきっかけとなった。「政治」を扱った授業では、市民の権利や選挙制度の在り方について議論し、民主主義社会の仕組みをより深く理解できた。「芸術」では、芸術作品や芸術教育の役割について学び、文化的活動が人々の感性や価値観に与える影響を改めて確認した。このように、授業を通じて語学力の向上だけでなく、幅広い社会的・文化的テーマに関する知識を獲得できたことは大きな成果であった。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように（気持ちなどが）変化したか。(400 字程度)

授業を受ける前は、自分の英語力に大きな不安を抱いており、特にスピーキングやライティングでは限られた語彙と表現力の中で意見を伝えることが難しく、授業についていけるのかという心配が常にあった。また、授業で扱われるテーマも健康や政治など幅広く、自分にとって馴染みのない分野について議論することも難しく感じていた。しかし、実際に授業を受ける中で、完璧な表現を求めるよりも、自分の考えを積極的に伝える姿勢が大切であると学んだ。ディスカッションやグループワークを重ねるにつれて、多少の誤りがあっても相手に理解してもらえするという経験を積み、発言への恐怖心が次第に薄れていった。さらに、課題やエッセイを通じて論理的に文章を構成する力が身につき、学びの成果を実感できたことが大きな励みとなった。授業を終えた今では、英語学習への意欲が以前より強くなっている。語学力の向上に加え、様々なテーマを英語で考えることで新たな視野を広げ、自分自身の成長を実感することができた。

(4) 今後どう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

今回の留学を通して学んだ英語の四技能や、多様な社会的テーマについて考える姿勢を今後の学業に生かしたい。特に、スピーキングで得た「積極的に発言する姿勢」や、ライティングで養った「論理的に構成する力」は、ゼミや研究活動において必ず良い影響を及ぼすと感じている。また、留学中に触れた健康や教育、政治、芸術といった幅広い分野の知識は、自分の専門分野を学ぶ上で様々な視点を与えてくれると思われる。今後は、英語力のさらなる向上を目指し、IELTS や TOEIC などの資格試験にも挑戦しつつ積極的に自ら発信できる学生を目指したいと考えている。

YCU 第2クォータープログラム 派遣学生報告書

氏 名	Y.Y	学部・学科	国際商学部 国際商学科
学 年	2 年	派遣国	ニュージーランド
派遣大学	リンカーン大学		
コース名	English for Academic Purposes (EAP)		
期 間	2025 年 6 月 30 日～ 2025 年 8 月 29 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800 字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

授業に関しては、Writing、Reading、Speaking・Listening の4技能を3つの授業に分かれて行い、この4技能に加えて Research Skill 1(RS1)、という学術的なレポート作成を目指した授業の合計4種類の授業があった。また、1module 間で Writing と Reading はそれぞれ二回ずつテストがあり、RS1 を除くすべての授業共通で週ごとに animal world や the state、といったトピックが設けられており、テストもそのトピックに関する問題が出題された。Writing は主に IELTS の writing test に倣って行われ、第1、2、4週はエッセイ、第3週は表やグラフの説明に焦点を当てた授業であった。授業内容は文章構造や語彙、文法、言い換え等を習った。宿題は先生やクラスによって異なるが、ほとんど毎日あった。Reading では scanning や skimming といったスキルを授業や課題を通して練習した。授業では主に speed reading という、リーディングスピードとその正確性の向上を目指したものをを行い、宿題では毎週記事を読みその要約等を行う reading journal や読解を行った。また、語彙にも焦点を当てており、具体的には vocabulary sheet の作成や単語の意味の推測等のアクティビティを行った。テストにもこれらの授業内容が反映された問題が出題された。Listening・Speaking の授業内容は先生によって少し異なるように感じたが、共通して3～5分のプレゼンテーションを行った。プレゼンをする前にスライド作成ポイントやプレゼンテーションにおけるポイント等を授業で教わった上でプレゼンに臨む形であった。他には2～5分のビデオや音声を手書きで聞き、メモを頼りに簡単な要約等を行う listening journal をペア間で共有するというアクティビティがあった。印象深いのは4コママンガのセリフの空欄をすぐさま考え先生やペアと会話を行う授業だ。RS1 ではモジュールごとにトピックが与えられそれにたいして500字程度のレポート作成が求められた。初週を除いて毎週提出物があり、第二週はアウトラインの作成、第3週は first draft の提出、第4週に final report の提出があった。授業内容はこの提出物に対応して行われ、最初はレポートの概要やメモの取り方、次にパラフレーズや参考文献の記載法といった講義が行われた。First draft 提出後、先生がチェックし多々コメントをもらい修正した上で最終レポートを提出した。

全ての授業において、AI の使用禁止は入念に言及していた。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

全ての授業で共通してコミュニケーションの重要性を感じた。Listening・Speakingに限らず、すべての授業でペアとの共有や共同作業が頻繁にあったが、英語のレベルに限らずまずは自分からコミュニケーションを取ろうとする態度を示すことで友好的な対話をすることができた。次に、Writingの授業を通じて論理的な文章構造の構築をすることができるようになったと感じる。もちろん語彙や文法等の基礎知識も得ることができたが、最初のプランニングが文書全体の論理性にとっても影響することも知った。Readingの授業では読解速度やscanning、skimmingといった様々な能力の向上はもちろんだが、問題の特性に適した方法の選択の重要性を知った。Listening・Speakingではプレゼンに関して多くの知識を得ることができた。具体的にはスライド上の色使いの注意や文字を少なくし、イラストや画像の活用すること、そしてプレゼンでは観客とのアイコンタクトや問いかけ、身振り手振り等の様々なキーポイントを学んだ。プレゼンの他にも、ちょっとした英会話での注意点やキーポイントに関する知識も得ることができた。具体的には、言葉遣いだけでなく返答スピードや抑揚が相手に与える印象の良し悪しにとっても影響することだ。最後にRS1では特に学術的な記載法、具体的にはフォーマルな単語の使用や多様な文章構造の使用法に関する知識を得ることができた。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように(気持ちなどが)変化したか。(400 字程度)

授業を受ける前は自分の英語力に不安を感じ、自分の言いたいことが伝わるのか、また他人が言っていることを理解できるのか不安に感じていた。しかし、留学前後で比べてみるとこの不安が完全に拭き切れたとは言えないが、前に比べて不安は少なくなり、自分の正直な考えや思いを伝えよう、という意識が強くなったように感じる。また聞き取りの側面に関しても、曖昧に捉えることが少なくなり意味を相手に再確認したりするなどしてより理解しようという意識が強くなったように感じる。また授業中に限ってだが何かしらの質問に対してほとんど自分の意見を持っていたように感じ、先生への質問も前回より増えたように感じる。この変化から、以前は周りを気にしすぎて自分を閉じ込めガチになっていた部分が、少しオープンになりより主体性を持てるようになったのだと思う。また自身に関する様々な不安による自身のなさも、今回のプログラムの授業内容であったり先生からのコメント等を通して改善され、変化したように感じる。

(4) 今後どう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

主体性の向上は英語での勉強に限らず何事にも活かすことの出来る重要な要素だと思うので、この向上を維持、もしくは向上させ続けてより有意義で自分の興味を極めた学業成果に繋げていきたい。また、今回のプログラムを通じて日本との違いを多々感じるがあったが、この経験をもとに世界は地外で溢れていることを認識し、違いへの柔軟な対応ができるような素養をより積んでいきたい。この違いというのは単なる異文化だけでなく、一人一人の間にある価値観や考えの違いにも応用することができると思う。将来的により多くの視点を持った偏りの少ない判断ができるよう、今からでもその意識は持ち合わせていきたい。

